

サンセット
マーガレット



mikatuki98

何かを模索しながら漫然として只、虫の音に耳を傾ける。

いつも体内のどこかしらから流れ来る音楽も無く、何かの答えを出そうとしてるようで、それが何かまとまりが見つからない。

公平は自分の名前に恥じないように、仲間を公平に扱い接触して来た。

しかし公平は知っていた。

誰に対しても同じように振舞うことは不可能だ。

今夜、食後に食べたヨーグルトの白さが妙に思い出される。

『何も混ざらなくても、美味しいじゃないか……』

公平は昨日まで食べていたブルーベリーのヨーグルトを否定してみたかった。

自分を否定することは耐え難い。

ならば自分に係わって来たものを否定して肩代わりをする。

『ふん。 オレもチンケな人間に成り下がったものだな……』

公平は自分を唯一仲間として認めない堅次郎のことを不意に思い出した。

『名前のせいかな？ 堅いな…… いいじゃないか。 オレの世界に興味がなくとも人間として仲間だろ？』

今日、堅次郎に昼間言った言葉を反復してみた。

『まあ、いいさ。 オレはおまえを人間として接している。 只それだけだ！』

公平が堅次郎のことを考えていた頃、堅次郎の記憶には公平の言葉など、最早何処にも無かった。
了

12 「ベタベタ・ビター・スイート」

ミルクキャラメルとミルクチョコレートを握りしめていたベタベタの手が腕をわしづかみにする。

毛むくじゃらな腕にベドベドが絡みつき模様を描いた。

それを見てケラケラと笑う黄色い声が鼓膜をビリビリと震わせ、耳垢がガサガサと鳴った。

「綿棒だ！ 綿棒を取ってくれ！」

咄嗟に叫んだ後に後悔した。

ベタベタの手が綿棒を握り、ベタベタの手からベタベタの綿棒が手渡された。

「しまった！ あーちゃんに言ったんじゃないんだよ」

「あーあーあー」

「ごめんごめん！ あーちゃんありがとね」

毛むくじゃらな腕にあーちゃんは抱かれた。

「ママは…… もう居ないんだ」

「あーちゃん、いる！」

「……」

頬を寄せると耳を覗き込んでベタベタの綿棒が耳垢をごっそり捕まえてきた。

「でかしたぞ！ あーちゃん」 了

13 「一本道」

一本道を歩き続けると、途中で小枝のように径が分かれている。

男たちは目を凝らし、鼻をひくつかせ、どの道へ進路を変えようかと思案している。

一人目が一つの径を選んで行ってしまった。

それに続くように全ての男たちはそれぞれ選んだ径へ行ってしまった。

不思議なことに男たちの数と径の数は同じだった。

再びわたし一人になり一本道を歩き始めようとした時、

青い身体に桃色の羽、そして黄色のクチバシを持った鳥が目の前を過ぎった。

「これからどちらへ？」

鳥が一本道の真上に架かった小さな虹の上に止まり訊ねた。

「この一本道を進んで行くだけです」

毅然と応えた。

「では、この虹のアーチをくぐることをお勧めします」

「はい。ではそうします」

素直に応えた。

「心のままに進め進め♪」

鳥は歌いながら一本道の遥か彼方へ飛んで行った。 了

14 「吸い込まれた窓」

もう二度と再び開けない窓が、蒼い夜の空に吸い込まれて行った。
名残惜しそうに窓が吸い込まれた方向をいつまでも見つめていたが、涙は出なかった。
多分、涙も一緒に吸い込まれたのだろう。
最後まで橋の架からなかった川は、昨夜からの雨で水かさが増し澱んでいた。
きっと窓と一緒に吸い込まれた涙が雨になって、天から全部この川に降り注いだのだろう。
一昨日まで川辺に咲いていた小さな花も今は無い。
ただ記憶の中に儂い姿をひっそりと残して消えた。
新しい窓が天から舞い降りて来るのは今から1万年後らしい。
その時この川は砂漠になってラクダが歩いているのだろうか？
それが自分の姿だとしたら、もはや未練は何も残らないに違いない。
今直ぐこの世から永遠に自分の姿をあの窓と共に、空に吸い込ませてしまうだけ。 了

「アリアの旋律に乗せられてキミは来たと言うのか？」
まさかそんなことはあるまいと気を紛らすようにTVのスイッチを入れると
「ボクが出ているよ！」とキミが指差した画面には、
太陽の熱に蠟の羽が溶けて地に堕ちて行くイカルスの姿があった。
彼は最期の瞬間、勇気という徳を得た褒美にアリアの旋律に救われ、
ここまで旅を続けて来たと言った。

ボクは彼の話聞きながらTVの映像から目が離せない。
突然、画面が切り替わり、教会のパイプオルガンが鳴りだした。
「！ この曲は……」
「そうさ。アリアさ。この曲にボクは……ん？何を数えているんだい？」
「……パイプ」
「……」
「このオルガンのパイプの数……何本あるんだろう……？」

ボクは目の前に居るイカルスの存在を
自分の意識から失くしてしまおうとしていたのだろうか？
いや、そうじゃないと思った。
ボクがパイプの数を最後まで数え終わるとアリアも終わった。
そして期待通りに、目の前のイカルスも姿を消していた。
そう、ボクは彼の存在を認める勇気が無かったのだ。了

君が僕の奏でるリュートの音に合わせて踊り始めた。
何度もスカートすそをひるがえしては何かを叫びながらタップを踏む。
狂ったように、狂ったように。
いや、彼女は狂ってしまったのだ。
苦しそうな声が僕の胸ぐらを掴む。
利口そうな顔が僕の頬を撫でる。
お前も狂え！　と言わんばかりに彼女は僕の廻りを踊り続ける。
愛しいルナ……
タップが止み、彼女が床に倒れ込んだ。
僕は演奏を止めてリュート置いた。
止めないで……
彼女の消え入るような声。
まだ闘い続けようと言うのか？
彼女の流した涙に反射した月の光が、僕の演奏を止めさせてくれない。
わかったよルナ……　このまま僕は君のために……　了

17 「あの海へ」

叔父に抱かれた幼子が指差す方角には関門海峡の海が広がる。

「おかしゃん（お母さん）がいる」と告げる幼子を叔父は不気味がって二度と抱かなかった。

「まさか龍神が母でもあるまいに……臆病な叔父さま」

ませた口調で乙女になった幼子は叔父の昔話に冷ややかな笑顔を見せた。

成人すると娘はいつも関門海峡の海を眺めに来た。

岩に寄せるさざ波に誘われ浪打際に立つ。

見える筈もない海の底の奥底を無言で見つめ続ける。

『母上……』

彼女の口から漏れた独り言は誰にも聞こえなかった。

そして彼女自身もその声が自分の心から響いて来ることに生涯気付くことは無かった。

ただ83歳になった翌年に迎えた春。

彼女は今わの際に漏らしたと言う。

「あの海へ……やっと、帰れます」 了

畳に脚を投げ出して座っているアレクサ。

彼女の脚は腿の付け根から足首までほぼ凹凸が無い。

横に並んで座っているサヤカの膝坊主のように盛り上がっている箇所が全く無い。

おまけに座高は同じなのにアレクサの足先はサヤカより10センチも先にある。

それに気付いて思わず膝を曲げるサヤカ。

ロンドン大学在学中のアレクサは、夏休みを利用して日本の伝統芸術を学びに来た。

アレクサが一番に苦手なのは茶道だと言った。

あの真っ直ぐな脚なら本当は苦手なのは単に正座だけなのだろう。

アレクサの英語はブリティッシュイングリッシュだ。

サヤカにはその発音には裏にゴムがついた靴下でフローリングを歩く時のようなツッカカリがあると思った。

時々、喉にクッキーの破片でも詰まらせたみたいだとも思った。

英国人がティーが好きなのはクッキーな発音が関係しているかも？と想像してニヤケた。

そんなアレクサにサヤカが一番驚いたのはアレクサのバストだった。

スリムなボディーにボーリングボール級の大きさにサヤカは目を見張った。

『す……ご……い……な……』

それ以来、サヤカはTVに頻繁に登場するグラビア界の巨乳アイドルにすっかり無反応になった。

了

19 「パン屋のおばさん」

遠目に見ると開いているのか閉まっているのか判らない小さなパン屋。

この街に越してきてから看板だけを見てきた。

隣の本屋に寄ったついでに今日初めて店に入ってみた。

一番に目に付いたポテトサラダパンを買って食べた。

パンの見かけはコッペパンだが、フランスパンの食感があった。

美味しいと思い、半月後二度目の来店客となる筈が、閉まっていた。

遠目に見ると開いているのか閉まっているのか判らないからずっと休みなんだろうと思った。

もしかしたら営業を停止したのかもしれないとも思った。

遠目にやり過す日々。

更に半月後、もしかしてと思い店の前まで行くと、ようやく二度目の来店客になれた。

「ずっとお休みされているかと思っていました」

「そうそう、ずっと休んでいたのよ！」

パン屋のおばさんは、二度目の来店客であるわたしに休んでいた理由を語りつくした。

三度目の来店客、四度目の来店客になったが、パン屋のおばさんは二度と再びわたしに何かを語ることは無かった。了

キミが失くしたものは、何だろうね？
失くしたからには、一度手にした筈だよな？
だけどもしかして、初めから無かったのだとしたら？
あると思うのも、ないと思うのも、
それは多分、心がアミューズメントパークだから。
興味が向いた時だけ駆け寄って行く。
今日はどんなアトラクション？
明日もパークに来るのかな？
最近夜にはイルミネーションが綺麗だよ。
でもキミはもう、それを知らないね。
だってパークはもう閉鎖されたと、思い込んでいるからね。
自分で鍵を掛けてしまったことも忘れて…… 了